



エッセイ

## そこにキラリと 光るもの

SCA 14期 若林 里咲

薄明るい部屋の中央にできた人だかりの陰に、何かがキラッと光った。その一瞬の輝きに目を奪われ、思わず足を止める。部屋の入り口でじっと宙を見つめるのは、黒人のガードマン。ささやかな緊張感の中、光の正体の方へと歩を進める。心なしか、少し鼓動が高まる。

現れたのは、大きなブルーダイヤモンドのペンダントだった。ホープダイヤモンドと名付けられたこの宝石は、頑丈なガラスケースの中でまばゆいばかりの光を放っている。なんと、45.52カラットもあるそうだ。こんな宝石を身につけるのは、一体どんなお姫様だろう…なんて、つい妄想にふける。

しかし、と我に返る。ここは宝石店でも大富豪の家でもない。訪れたのは、ワシントン D.C.にある国立自然史博物館。Harry Winston から寄贈されたこの美しい宝石も、実は立派な科学の展示品へと改めて宝石に向き合う。

そもそも、なぜ宝石がここに…？実は、ブルーダイヤは科学的にも大きな魅力を秘めるのだ。ダイヤモンドは炭素からできる。鉛筆の芯と原

料が同じとは、わかっていても不思議だ。そして、ダイヤモンドにふつう色はないが、この宝石はブルーダイヤ、つまり青色なのも興味深い。鉱物の色は微量な不純物の種類によって決まることが多いのだが、この青はホウ素に由来するようだ。さらには紫外線を当てると、今度は赤い光を発するらしい。ただ、今のところその理由は分かっていないとか…。

少々釈然としない思いでもう一度青の光を見つめる。神秘的だった。そして、ふと気づく。きっと、科学を解説するだけが博物館じゃない。それは、いまだ解明されぬ謎への好奇心を掻き立てる場所でもあるのだ、と。なかには、宝石を一瞥しただけで、キレイだねと通り過ぎる人もいるかもしれない。だが、その奥にキラリと光るサイエンスに思いを馳せた時、私にはその青色が一層深く、美しく感じられるように思う。

一抹の名残惜しさを覚えながら青の光を目に焼き付け、踵を返した。

今回の号より、「サイエンスコミュニケーターだより」を一新しました。リニューアルしたデザインや、新設した「表紙クイズ」、「サイエンスコミュニケーターの目」のコーナーはいかがでしたか。

広報誌制作委員では、引き続き、より魅力的な誌面を目指して制作を進めてまいります。今後も「サイエンスコミュニケーターだより」をよろしく願いたします。

科博 SCA 会員の活動をブログにて紹介しています。ぜひご覧ください。  
<http://kahakusca.edoblog.net/>



科博 SCA の広報誌

# サイエンス コミュニケーター だより

Volume 13  
July 2020



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座（SC 講座）」を開講し、その修了生は200名以上となっています。本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。



撮影：武田美亜（SC 講座5期）

## Question 表紙クイズ

これは何のアップ？  
①布 ②コケ ③海藻

開いて  
答えを  
確認！



## 五十嵐 崇弘 Takahiro Igarashi

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター  
養成実践講座SC1修了(12期)  
東芝未来科学館勤務。  
ワークショップの企画から講師まで  
毎日いるんなことに挑戦中。

### Q. 現在の仕事を教えてください。

#### A. 東芝未来科学館でスタッフをしています。

東芝未来科学館では、ほとんどの土日祝でイベントを開催しており、私はそのイベントの企画・運営を行っています。例えば「はじめてのはんだ付け」というイベントでは、私が講師を務め、ラジコンで動くすばしっこいロボットを作ります。ロボットははんだ付けをしないと作れないのはんだ付けに挑戦してもらいます。難しいイメージがありますが、サポートしながら一緒にやってみると意外と簡単！という反響が多く、大盛況のイベントでした。

とはいえ準備は本当に大変で、毎回直前までヒーヒー悲鳴を上げています。イベントに参加してくれた子供の楽しそうな顔を観たとき、「楽しかった」という言葉を聞いたとき、ああやってよかった！とやりがいが一番感じる瞬間で、この喜びを味わうために頑張っています。

### Q. 働いてみて感じたギャップはありますか？

#### A. お客様の年齢層が思ったより幅広かったことです。

科学館というと小学生高学年が多いイメージでしたが、イベントなどの参加率はむしろ低学年が多い傾向にあります。そして東芝未来科学館で特に多い来訪者は未就学児なんです。初めは飽きずに最後まで参加してくれるかな、という不安もありましたが、未就学児の入館には必ず保護者の付き添いが必要なので、安心してイベントを進められますし、むしろ話も素直に聞いてくれるという印象です。

また、子供向けに教えていると隣にいる大人の方も興味をもって質問して下さることが多々ありま

す。子供から大人まで幅広い層に伝える機会に恵まれ、多くの人に科学を伝えたいと思っていた自分にとっては思わぬ形で願いがかなっています。

### Q. SC 講座を受講したきっかけは？

#### A. 多くの人に科学を伝えることができそうと感じ、受講しました。

この講座を知った時は、学校教員を目指しつつも、学校に縛られずより多くの人に科学を伝えたいと思っていた時期だったので、教員とは違う視野から見るができるかなと思いました。それまでサイエンスコミュニケーションというものが何かということもほとんど知らなかったのですが、こういう世界もあるのか！と強い印象を受けました。

サイエンスコミュニケーションという名前から、科学館の職員や研究機関の広報などをイメージしていましたが、講座ではメディアや塾の関係者の方も講師をされていたので、視野が広がり、学んでいてとても楽しかったです。

### Q. SC 講座での経験はどのように活かされていますか？

#### A. 視野が広がり、引き出しが増えたと感じます。

企画を立てる際にはまずテーマを決め、そこからいかに内容を詰めていくかが大変なのですが、SC 講座を受けていたからか、選択肢の幅をいろいろな方向に広げて行くことができていると思います。どうしても企画の中心にいると自分の好みや専門性によりがちです。複数の視点から見れるように、同僚や上司、はたまた友人に意見を聴くようにしています。科学館がある川崎市とのつながりもあいまって、本当に幅広い人たちとお付き合いをさせてもらっています。

### Q. 五十嵐さんにとってサイエンスコミュニケーションとは？

#### A. 相手の好奇心のお手伝いをする事だと思います。

興味を持ったその先にある「ああ、こういうのもあるのか！」という学び、気づきこそが自分の糧になる、そう私は思っています。その気づきに至る第一歩の背中を優しく押してあげることがサイエンスコミュニケーションだと思います。

背中を押してあげる方法として、私の場合はそれぞれの年齢層に合わせた表現を行うよう意識しています。これが思いのほか大変で、教える対象は決まっているのに、その層に適した表現がなかなか見つからない。毎回良い表現を生み出す苦しみを味わっています。見つかってしまえばあとはすんなりすすめられるので、そこに至るまでにどれだけ自分が視野を広げられるかが勝負！コミュニケーターの腕の見せ所かもしれないですね。

## Answer 表紙クイズの答え ③ 海藻

これはアヤニシキという海藻（その中でもさらに紅藻）の仲間です。伊豆半島や、それより南の日本の海の中で見られます。粒状のものは、成長すると出てくる嚢果（のうか）というもので、中に胞子が入っています。

